会 議 記 録

会議名称	第３回　杉並区教育ビジョン策定委員会
日　　時	平成23年７月７日（木）　午後１時59分～午後４時21分
場　　所	東棟６階　教育委員会室
出 席 者	委員 永井、坂野、清水、大浦、鈴木、神谷、野口、藤川、中島、秋山、松浦、吉田、玉山 区側 教育長、参事（特命担当）、教育改革担当部長、中央図書館長、庶務課長、教育人事企画課長、事務局統括指導主事、教育改革推進課長、学校適正配置担当課長、学務課長、社会教育スポーツ課長、済美教育センター副所長、教育支援担当課長　ほか関係職員
配布資料	１　中学生レスキュー隊について ２　中学生職場体験学習について ３　就学前ビジョンについて ４　小中一貫教育について ５　第２回策定委員会の主な意見 ６　第２回策定委員会の議論の整理
会議次第	１　開会 ２　資料説明 ３　意見交換 ４　今後の進め方 ５　次回以降の日程等 ６　閉会

○庶務課長　定時になりましたので、第３回教育ビジョン策定委員会を始めさせていただきます。

では、委員長、よろしくお願いいたします。

○委員長　第３回目に当たりますが、杉並区教育ビジョン策定委員会を開催いたします。

委員の出席状況についてはいかがでしょうか。

○庶務課長　本日、全員出席でございます。

○委員長　ありがとうございます。

まず、事務局から議事録並びに本日の配布資料の説明をお願いいたします。

初めに、議事録についてお願いします。

○庶務課長　第２回の議事録につきましては、今、最終確認をしているところですので、今日または明日に皆さまにメールをしたいと思います。もし修正が必要であれば、来週の11日、月曜までにご連絡をいただきたいと存じます。そこで修正がなければ確定とし、ホームページでご覧いただけるようにしたいと思います。

○委員長　ありがとうございます。

それでは、配布資料ですけれども、前回、前々回、このメンバーから事務局に幾つかリクエストがありました。それについて事務局側から資料が出ておりますので、簡単に説明をしていただくこととしましょう。よろしくお願いします。

○庶務課長　前回までにリクエストがございました資料が１から４です。

各資料、事前にお送りしておりますので、基本的には細かく説明をいたしませんけれども、ご質問があれば後ほどお受けしたいと存じます。

まず、資料１ですが、中学生レスキュー隊の概要でございます。

この制度は平成17年度から始まり、昨年度、全区立中学校で編成されました。意義、役割等については記載のとおりでございまして、参考のために実際に活動した中学生のアンケート結果も加えております。

次に資料２ですが、キャリア教育の一環の資料として、中学校の職場体験学習の概要について記したものでございます。

杉並区におきましては、平成17年度からすべての中学校で５日間の職場体験学習をしております。基本的には地域の商店や企業にお邪魔して、ほぼ１週間体験しています。こちらも、中学生から回答されたアンケート結果を裏面に記載しています。

次に、資料３ですが、こちらは就学前教育振興ビジョンの策定に向けた取り組みの資料でございます。家庭教育を含んだ区の就学前教育の総合的な展開を図るために策定するということで、平成22年11月から策定委員会を立ち上げ、現在、検討しているところでございます。今年度中に骨子案をつくるということで、教育ビジョン策定委員会とはスケジュールがずれています。「教

育ビジョンは９月に骨子案をつくりますよ」というお話をし、どういう形で柱を盛り込んでいくかは、夏に調整をという申し出をしています。裏面には、これまでの議論の整理が記載してあります。現在、３点について課題が整理されている状況で、今後、骨子づくりに向けて、いろいろ議論を進めるということでございます。

続きまして、資料４は、小中一貫教育の資料ですが、こちらは、統括指導主事からご説明させていただきます。

○統括指導主事　失礼いたします。統括指導主事の白石でございます。

私からは小中一貫教育についてご説明をいたします。資料４、Ａ３判の縦のものでございます。

杉並区では平成21年９月に杉並区小中一貫教育基本方針を策定いたしまして、現在、区内全小中学校において、小中一貫教育を推進しております。この義務教育９年間というのは、自立に向けた準備を行う大切な期間でございます。杉並区が行う小中一貫教育とは義務教育終了までに、全ての子どもたちが自立して社会で生き、豊かな人生を送ることができるよう、自信を持って、自らの人生を切り拓いていくための基盤を築くことを目的としております。

しかし、小中学校の接続の部分において、幾つかの課題が見られます。例えば、中学校で必要とすることが小学校で十分に定着されていないとか、小学校で身につけたことが、中学校で十分に発展させられていないとか、小中学校の教員がそれぞれの内容について理解していないなどの実態が見られます。

これまでも小学校６年間、中学校３年間において教育の内容を充実させてきたところではありますが、これからは義務教育の背骨となる９年間の一貫した理念に基づく教育をそれぞれが行い、切れ目のない連続した学びを展開し、一人一人の子どもの調和のとれた人間形成を行っていくことが必要です。そして、そのような社会参加のための基盤をつくることは、自治体の責任でもあります。

杉並区は、これまでにも「いいまちはいい学校を育てる、学校づくりはまちづくり」を目指し、地域と協働する学校づくりを推進してまいりました。義務教育の中心的な担い手は学校ではありますが、学校、家庭、地域がそれぞれの役割と責任のもと、よりよい学校づくりという共通の目標に向かって協力し合うことを通し、より質の高い教育が展開されると考えられます。

そして、我がまち、我が学校をよりよくしようとする当事者意識が高まることにより、地域コミュニティそのものも再生されると考えております。

現在、平成27年度の開校に向け、新泉、和泉地区において、新泉小学校、和泉小学校、和泉中学校の３校が、施設一体型であります小中一貫教育校の準備を進めているところでございます。本日、配布させていただきましたカラー刷りの冊子、小中一貫教育ニュースレターは、それらの取り組みについて、具体的に記載しておりますので、後ほどご覧いただければと思います。簡単

ではございますが、私から杉並区の小中一貫教育についてのご説明をさせていただきました。

○庶務課長　以上、資料４までがリクエストがあったものです。続きまして、資料５ですが、これは第２回の委員会の主な意見をまとめたものですので、今後の議論の参考にしていただきたいと存じます。

それから、資料６ですが、こちらは第２回の委員会で出されました、皆さん方のご意見を、事務局と委員長と職務代理者とで相談をしながら整理したものでございます。

改めて委員長からお話があると思いますけれども、本日の意見交換の資料としていただければと思います。

資料説明は以上でございます。

○委員長　ありがとうございました。

小中一貫であるとか、就学前教育に関連することは、これからもこの委員会に少し関係してくることだろうと思います。また、小中一貫で使われているキーワードは、我々が議論する一つのキータームに使われているようにも思われますので、それも含めながら議論を進めてまいりたいと思います。

今、資料５、６についてあらましの説明がありましたけれども、おさらいと整理をするために事務局に作っていただき、事前配布をしたものです。これをベースとし念頭に置きつつ、本日は６－２、６－３、６－４というところあたりを中心に議論をしてまいりたいと思います。６－２が前回２つの班に分けて行った議論ですが、私がいましたグループが資料６－２、職務代理者がいらしたところが６－３です。６－４は、融合案ということで提示をしていただきました。ですので、６－２、３をベースにしながら４をたたき台にして、骨子案寸前のところまで持ち込んでいきたいと考えております。

そこで、一番大事な、基本目標の部分と、それに連動する目指すべき人間像、育てたい人間像、もしくは育みたい人間像のほうがいいような気もしますけれども、これは後で議論することにしましょう。このあたりを表現も含めて議論をし、絞り込んでいきたいと思います。そうすれば、必然的にその下の基本的な視点というところに目が行くわけでもあり、そこにも目を配っていただきながら、議論をするという形で参りたいと思います。まずは、「今後10年間を見据えた杉並が目指す教育」の部分ですが、ここに書かれている５つの文章から、可能であれば１つ、あるいは２つにすれば、鮮やかに今後10年間の目指すべき教育というのが見えてくるのではないでしょうか。また、これは職務代理者もおっしゃっているのですが、１文字、もしくは２文字、３文字ぐらいの短いタームで言ってみて、それにサブタイトルをつけると、すっとわかるという考え方もあるかもしれません。これは議論次第で、皆さんと一緒に考えたいと思いますが、この６－４の基本目標について、いかがでしょうか。

○委員　基本目標に５つ丸がありますね。この下の２番目は、３番目と４番目を合体させたもの、地域ぐるみがないだけで、同じと考えてよい、言葉は同じですよね。

○委員長　どっちの表現がいいか、あるいは融合するとこういう表現になるねというのかもしれません。２本かな……

○職務代理者　これ以外でも構わないですから。この前、私はこういうふうに言ったのに、ここに入っていないじゃないというのがあっても構いませんので。

○委員長　前回、前々回の議論を振り返って見てみますと、共生とか、支え合うとか、コミュニティの力とかをベースにしながら、教えることから学ぶ方法への転換というようなことが話し合われていました。それが非常に主要なキーワードかなと思いながら見ていた記憶がありますが、いかがでしょう。

○委員　支え合う教育というのは、お互いがお互いを理解しながら支え合うとか、伝え合うとか、そういう部分を１つにまとめた言葉かなと。学び合うというのは、少し違って、お互いを高め合うために一緒に学んでいきましょうみたいな感じというふうに思うんですが、学び合うという言葉と支え合うという言葉をそれぞれ分けて、誰もが共に学び合う教育と、みんなで支え合う教育という形か、または、互いに支え合いながら学んでいくというような言い方はいかがでしょうか。

○委員長　この学び合う、支え合うというのは、子どもたちへのメッセージだけではなくて、大人を含めた地域全体の人々に対するメッセージだと思います。ですので、教育イコール学校教育と見る向きが多いのですが、もっと広い感じで見ているというニュアンスがあることは間違いないと思います。

○委員　６－４の基本目標の「今後10年を見据えた」というところを見ていますと、以前に坂野班で割と強く出ていた、生きる力というところがちょっと、これは共育というところを言っているんですけれども、共生という部分がちょっと感じられないような気がいたします。

　学び支え、学び育てるという言葉が出てくるんですけれども、僕は「地域」という、例えば「地域ぐるみでの地域」という提言を、前回、実は現役世代が抜けているというお話もさせていただいたので、やはり学校、家庭、地域という表現で分けたほうが「地域ぐるみ」というよりも、わかりやすいかなと思います。また、共に支えるというよりも、共に生きるというような形に変えると、もうちょっと力強く義務教育を超えた生涯の言葉になるような気がいたします。

○委員長　ありがとうございます。

○委員　その場合の学校というのは、幼稚園とか保育園とか、子供園とか、就学前のことを含めて考えていこうというスタンスですか。

○委員　そうですね。

○委員長　それは子ども同士にも言えることですし、子どもと大人、子どもと地域でも言えるし、

広い概念でとらえることが可能ですね。

1996年に、ユネスコ国際委員会が、「学習：秘められた宝」という、かなり長大なレポートを発表しまして、そこに学びの４本の柱というのがありました。１つ目が、学校教育がこれまで主流としてきた「知ることを学ぶ」というlearning to know、２つ目が、「為すことを学ぶ」というlearning to do、それから３つ目に、「共に生きることを学ぶ」learning to live together、４つ目に、「人間として生きることを学ぶ」learning to beというものです。従来の学校教育は１つ目が中心であって、２つ目がちょっとあったぐらいです。これからの教育はこの４本の学びの柱が、一体なものとして展開されなければならないということが書かれていました。それをふと思い出しまして、その中の、「共に生きる」というのと「人間として生きる」という部分が、共生という言葉には入っているような気がしなくもないです。知ることを学ぶというのは当然の前提ですし、それについていなくとも学ぶということはあるわけですから、このあたりがかなり説得力を増す部分かなと思います。

ただし、杉並バージョンとしては、子どもたちへのメッセージというように見えて、実は、コミュニティや高齢者までを含めたものであると考えます。その場合、後でまた議論になると思いますけれども、地域密着型のコミュニティとエリアを超えたコミュニティといろいろなものがあります。ミッション型のＮＰＯもありますので、そういうものを全部ひっくるめたような感じの地域、あるいはコミュニティという概念になってくるのかなと、考えておりました。

○職務代理者　この資料６－４の「今後10年を見据えた杉並が目指す教育」という部分で、後ろが全部「杉並の教育」という言葉でまとまっているのですが、これは全部とって考えてみたほうが、発想が柔軟になるような気がするんですね。「杉並の教育」という形でまとめてしまうと、どうしても教育という言葉に、受動的なところが出てきてしまうので、それを取って考えていただいた方が、発想が広く豊かになるのではないかという気がするのですが。

例えば、２番目のところで言えば、「学び合い、支え合い、育ち合う」という形にして、後ろの「杉並の教育」という言葉を入れない。一番上であれば、「共に育ち、響き合う」という形。何かそういった形のほうがわかりやすいような気がします。「目指す教育」と言って、また「教育」と出てくる必要は多分ないと思うんです。

後ろを「教育」という体言止めの形にしてしまうと、そこに集約しないといけなくなってきてしまうので、収束型の思考になりやすいのですが、それを取ると、いわゆる拡散型の思考になるので、広がりが出るかなという気がするんです。

だから、私は先ほど打ち合わせのときにも、キーワードでということをちょっと申し上げたのです。余りきれいにまとめてしまうと、硬くなってしまうので、むしろ拡散型で、それぞれがイメージを膨らませられるような内容にしておき、どんなふうにお思いになりますかという形で、

ここは一緒だよねということが確認できればいいんじゃないかなと思います。

逆に言うと、これをやりますみたいな形で具体化してしまうと、今後10年間という未来の夢を語る楽しいところなのに、何となくつまらなくなってしまうような気がします。

○委員長　ここに書いてあることはどれもそのとおりだと思いながら、一番強調すべきキーワードをどうしましょうという要素があると思います。今のところ、共に生きる、それから……

○委員　今の職務代理者のお話を受けてですが、僕は逆に「杉並の教育」というところをつけたほうがいいのかなと思うんです。なぜかと申しますと、やはり都からの教育がおりてくるというイメージがありまして、でも、それとはちょっと違う杉並の独自の方向性なり、進み方というのが今までのビジョンの中にはございました。具体的に言いますと、ゆとり教育というのが10年間ございました。それまでに詰め込み教育があったからゆとり教育というのが出てきたんでしょうけれども、それをこの24年度から脱ゆとり教育という方向で始まろうとしています。ですが、始まりはいいと思うんですけれども、10年間のゆとり教育を受けてきた者は、ちょっと省かれてしまうような気がいたしまして、そのゆとり教育の良し悪しをきっちりと入れ込む必要があると思うんです。

それで、やはりゆとりは大事だと思います。詰め込みに逆戻りするわけにはいかないのではないでしょうか。ゆとりは必要だし、ゆとりがあるから創造ができるんだと、詰め込みの中にはやっぱり創造がなかなかできないだろうと。ただ、そういう深いところで考えてビジョンを打ち出すときに、大きく何とか杉並というのが抜けた教育は、大きく構えてしまうと東京都とか何とかとちょっと合わなくてなってしまうと危険かなというふうな意見です。

○委員長　理解できますが、例えばここにタイトルとして、「今後10年を見据えた杉並の目指す教育」というのをきちっと書き、別途、キーワードという形もあると思います。それから、おっしゃるように、何々を目指す「杉並の教育」としたほうがいいというのもあると思います。ですので、杉並の目指す教育というのは、キーワードとして厳然としてあるという前提でいいんだろうという見方もあると思います。

それから、ゆとり、脱ゆとりは、この話を始めると、二項対立型の論争になってしまうところが実はあるのです。しかも、文部科学省、中教審、それ以前の教育課程審議会は、ゆとり教育という言葉を使ったことは一度もありません。唯一昭和52年の学習指導要領改訂の際に、教育課程審議会が使ったことがあるのですが、それ以降、文部科学省、中央教育審議会ともに、ゆとりという言葉は一度も使っていません。マスコミ用語です。なぜかゆとりと書くと、すぐさま物事が解決できるかのような、あるいは脱と書くと、どうなるかのような言い方で、ひどく安易に使われているというのが現状なので、これがまた誤解を招く。ゆとりというと、誰のことを、何のことを言っているのかということになってしまうのです。それぐらい世の中に広がっている言葉で

すので、これに踏み込むと、話がそれていく要素もないわけではないのです。

ただ、おっしゃるとおり、ゆとりがあっての学びであるということも正しいのです。なぜかゆとりという言葉を出すと、二項対立型になりかねない要素を、今のところ我が日本では抱えているものですから、ちょっとそこまでは踏み込まないほうがいいのかもしれないなと思うのですが、いかがでしょうか。

○職務代理者　今のゆとりのお話で言いますと、89年（平成元年）の時は新学力観という言葉がキーワードだったんですね。98年（平成10年）の時には、生きる力というのが出てきて、2008年（平成20年）の指導要領では、キーワードの生きる力は変わりませんと言っているんです。

つまり、生きる力という考え方で、今、文科省が動いているということは、実は10年前と変わっていないという基本スタンスなんですね。では何が変わったかというと、文科省の当時の説明で言えば、学習指導要領が変わりました、ということです。要するに、目指すところは一緒だったのだけれども、最初に説明したときに十分理解してもらえなかったので、違った方向にいきました。だから、直しますというのが文科省の説明の仕方です。

98年（平成10年）の時には、内容を３割減らします、厳選します、というところだけがとらえられて、マスコミがゆとりということを言っていたわけです。ただ、それは内容を単に減らすということではなくて、考える力や、自ら学び考え行動する力というものをつけるということが趣旨であったのだけれども、うまく伝わっていかなかった。実際にはできなかった。なので、新しい指導要領で、誤解のないようにするという文科省の言い方になっています。生きる力とは何かというと、実はこれが一番難しくて、今、委員長がおっしゃったように、これを議論するだけで多分相当時間が必要になります。

ただ、生きるということ、すなわち、それまで学校でやっていたことというのが、社会と余りうまくつながっていなかったのではないかということが、少なくともそこの中にはメッセージとして入っているだろうと私は思います。

国際学力調査のＰＩＳＡだとか、さまざまな考え方も今、その生きる力と近いよねというのが文科省の考え方ということになっていますから、じゃあ生きる力というのは何ということのイメージを出していただけると恐らくいいのではないかと思います。少なくともあと10年ぐらいはそれで文科省は行くはずですので、前回みたいに５年たったら、途中で帰りますという禁じ手が出るかもしれませんけれども、基本的には大体10年ぐらいはやります。それで、生きる力って何というところのイメージを、杉並バージョンとしてどんな言い方でいきましょうかということでお考えいただくのが一番、外れにくいというか、恐らく国の施策なり、都の施策なりとも余りそごを来さない形になるんじゃないかと思うんです。このあたり、学校の先生方のほうがいろいろお考えのところもあるかと思うのですが、いかがでしょうか。

○委員　今の職務代理者の話でとても整理をさせていただきました。ありがとうございました。

それで、その生きる力というところと、先生のお話の中で社会との接続ということが出てきましたけれども、これが私はまさにキャリア教育ということだと思っています。社会との接続ということを、学校がどういうふうに意識して、子どもたちの中に主体的に勤労観と職業観ということを育てていくかということが、重要なことですし、それは子どもたちだけではないのです。ちょっと話が、この６－４の資料の下のほうに行きまして、ライフステージを通した学びの連続性、きめ細かな支援とか、それから、一番下にはキャリア教育を地域ぐるみで推進とあるんですけれども、これは学歴だけではなくて、キャリア支援というのは一生続くものと、とらえていけば、そこに生きる力ということを目指すということははっきりと柱として見えてくるなと思います。

あと、今後10年を見据えた杉並が目指す教育という中で、どの言葉でというふうにあらわすのはとても難しいと思うのですが、ただ、学び合う、育て合う、あるいは支え合うという、どちらかというと具体的なイメージが何となく見えてくるような言葉のほうがイメージしやすいのかなと思っています。

共に育つ、それから響き合うというのもわかるんだけれども、ちょっと私個人としては言葉でうまく言いあらわせないことがあるのですが、何かそれが、どなたにもすごく言葉で言いあらわせるような単語であらわされるのが目指す教育のキーワードとしてはいいのではないかと思いました。

○委員　ちょっとまとまらないかもしれませんが、恐らく前回までの話し合いで非常に重要なキーワードがこの基本的な視点のところにもたくさんあるんじゃないかと思うんです。今お話があった、キャリア教育もそうですし、インクルージョンもそうですし、ネットワークもそうです。そういった家庭、地域、そして子どもを中心とする、大人のネットワークがベースになって、これからの杉並をつくっていこうという視点は、このメッセージの中のどれにも入っているんじゃないかと思います。

本当はそういった新しいキーワードを使って、これからの10年を見通した形の文言をつくりたいのですが、やはりどうしてもそれらを網羅していくと、スタンダードというのでしょうか、そういう言葉にならざるを得ないんじゃないかと思うんです。ですけれども、前の10年とは違うんだよというところがこのピラミッドの中で明示できれば、今、ここに挙げていただいているところの、最大公約数でもいいかなという感じはします。

○委員長　少し発想を変えて、２番目の育てたい人間像というものをもう少し議論してみて、ここから逆にアプローチしてみましょうか。

○委員　１つ思ったことですが、職務代理者が「杉並の教育」というのを取ってしまったらどうだろうとおっしゃったときに、私は子どもの目線になってしまったのですが、例えば共に育ち、

響き合うではなく、共に育ち、響き合おうという呼びかけにするとすごく視野が広がったような気がしました。例えば、「学校、家庭、地域が共に支え、助け合おう」、今だと多分すごく助け合いの気持ちが子どもたちには芽生えているので、助け合おうといったようなキーワードもあってもいいのかなと思いました。

○委員長　呼びかけふうのアイデアですね。

　でも、いったん２番目の育てたい人間像のところあたりを少しやってみましょうか。丸が２つありますけれども、これを２つとも生かすのか、あるいは１つに絞り込むのかといったような議論が必要ですし、それを具体的に述べた、育てたい力を４つのままでいいのかというようなことも。３つぐらいにしようとか、５つは多いんじゃないのだとか、いろんな意見があると思うので、そのあたりの議論を少ししてみませんか。

○職務代理者　６－２と６－３と、前回のところと少し比べていってあげたらどうでしょうか。

○委員長　今、職務代理者から、６－２、６－３を見ながらというご提案がありました。坂野班、永井班で目指すべき人間像だとか、基本的な視点が出ていますので、これを見ながら話し合ってみませんか。

○職務代理者　資料６－２と６－３を合わせてご覧いただければと思うのですが、私が一番着目しているのは、資料６－３でいうと、「自ら考え」という言葉、また、育みたい力のところにある「自ら学び」という言葉。この、「自ら」というところです。

　同じようなことが、資料６－２の永井班の１つ目のところで、自己実現できる力とあります。本人から力強くということは多分皆さんに共通しているのではないでしょうか。これは教育では、外すことができないと思うので、その言葉は入れたいなというのが、私の１つ目のポイントです。

○委員長　ありがとうございます。

　そうすると、「自ら」をキーワードに使った何かができないかということですかね。

○職務代理者　６－４でいうと、自信を持って自ら歩むというような形で表現されている。だから、入っているわけですけれども、これはやはり外してはいけないところかなと考えているということです。

○委員長　そうですね。それと２つ目の、人との関わり合いの大切さ、それから、地域や社会に貢献する、これらも恐らく外せないのではないかという気がします。２本柱でもいいのではないでしょうか。

　前段の、夢に向かい、自信を持って云々というのは、子どもや若者たちへのメッセージが主であり、２つ目のほうは、子どもや若者たちへのメッセージであると同時に、親とか地域とか、近所の人たちとか、みんなここに含まれているんですよというニュアンスになってくるので、これは無理に１本化しなくてもいいのではないかという気がします。この文言そのものはいろいろ修

正する可能性はあるわけですけれども。

　それから、育てたい力で、他者を認め互いにやさしく支え合う、という文章ですが、お互いに支え合う力でいいと思います。

○職務代理者　あるいは、入れたい言葉だったら何でしょうか。これはあったほうがいいよねというイメージが、皆さんおありだと思うんですけれども。

○委員長　いかがですか。

○委員　僕は、育てたい人間像のところの、この２つのテーマをなかなか気に入っているんです。一つは、自分の内に向けて発する言葉であるし、もう一つは、自分と外との関わりという視点が明確なので、これは２つの見方であると同時に、１人の人間が高まっていくと、それがこういう貢献力もあわせて高まっていくんだという表裏一体の部分じゃないかなというふうに思います。

　その下の、育てたい力を見たときに、やはり何かを自分で判断していく、よく規範意識ということは言われますけれども、そういう判断する力、自己判断力というのでしょうか、そういうようなキーワードが、例えば４番の内容に入っていくとか、どこかで欲しいかなというような気がしました。

　それから、３番は多分、前回の永井班のほうで、あえて体の力というように表記されているのかもしれませんが、学校現場でも、今、子どもたちの体力ダウンに関しては、どうしていこうかということが大きな課題になっています。いろいろ考え方をつくるにも、コミュニケーション能力をつくるにも、健康がベースにないと何もできないということは学習指導要領の考え方にもあるところですので、この体の力というのは体力とは違う部分が多分あるのかなと思うのですが、絶対に必要かなと思います。言葉の整理等もしていきながら、この２番、３番、４番あたりは非常に重要な視点かなと思って聞いておりました。

　以上です。

○委員長　ちなみに、体の力という表現のキーワードを発した方はどなたですか。どういうニュアンスでおっしゃっているのかということをちょっと聞きたいので。

○委員　私が申し上げたように思います。私は学校経営計画や方針の中で、体力ではなく、あえて「体の力」ということにしています。運動能力的なものと、「食」にかかわる部分と、「健康・保健」にかかわる部分と、この３つがやはりそろっていないと、我々を支える体の力はできないので、体力向上と言うときはこの３つを学校の中で意識していきたいですね、という話はいつもしています。今回、そういうイメージでお話したように思います。

○委員長　僕はいいなと思ってお伺いしているのです。例えば、概念としては、早寝、早起き、朝御飯もこの中に入ってしまうわけですよね。

○委員　その視点は私も全く同じで、特にこの体力向上に向けては、ただ運動だけではだめなの

で、生活習慣づくりが非常に重要だということで、小学校のほうでは「カラダリョク」なんていう言い方をしているんですね。それは体力と同じ字を書くのですが、今、お話があったとおり、健康面に関わる全てを育てていこうという、杉並から発信しようみたいな勢いがあります。まだ中学校まで行っていないんですかね。

○委員　中学校では、「カラダリョク」という言葉はまだ一般化されていないと思います。

○委員長　わかりました。いい言葉だと思います。いわゆる競技スポーツやら何やらというわけではなくて、一番ベースのところを大事にしようという。

　ところで、私はこの中に、何とか感性という言葉が入らないかなと思っています。感性がかなり人間の源として働く。例えば、豊かな感性に導かれて、確かな学力がつくといったような言い方もできますし、いろんな感性、情緒を抜きにしてインクルーシブルな社会もあり得ないでしょう。また、共に支え合うということだってやはり感性だの、情緒だの、あるいは他者の存在に対する想像力が必要になってくるので、そういうキーワードが入ると、幅が広がるのかなと思いました。

○委員　地域との関わりを持つ共感力というものがすごく僕は大事だと思います。環境問題でも、区役所が消費電力の節約とか、いろいろ言い出しますよね。でも、それを実際に僕たちが実行していないと、区役所を訪ねた人たちというのは、区役所は何を考えているのだろうと思うのです。

　僕が昔、地域課長をしているときに、昼休みに電気を消すという、今は自動的に消してしまっているのですけれども、その当時はスイッチを押して消すという活動をやっていました。隣が環境課でした。環境課はいつも昼になると電気を消しているのですが、僕がいた当時の地域課は消していなかった。地域の人が訪ねてくるのが地域課で、そこが隣の環境課と同じように消していないとなると、環境問題について共感は得られないという話を部下にして、昼休みに消すようにしたんです。やはり地域と役所が一体になるのは、共感を持たないとできないなというのをその当時から思っていました。そういう意味では、感性というのは共感力みたいなものが大きいんじゃないかなというふうに思います。

○委員長　それは育てたい力の２番目の「伝え合い理解し合える」というところを、「共感」という言い方に修正することもできますね。しかも、内容も少し膨らみ、ステップアップできるというニュアンスが出てくると思いますが、いかがでしょう。

○職務代理者　いいと思います。

○委員　私も全く同感です。委員長が言われた感性というのを、２番目のところに当てはめていくと一番スムーズにいくんじゃないかと思いました。

　この育てたい人間像というところで、上の２つの丸、それから、４番はちょっとまだ私も整理がつきませんけれども、少なくとも３番までは発達の遅れや、障害のあるお子さんにとっても、

全部当てはまります。これを目指して教育をしているので、そこは全ての子どもに当てはまるというところでいいのかなと思います。

○委員長　おっしゃるとおりで、昨今の傾向を見てみますと、他者を認めるということが非常に少なくなってきています。

○委員　保護者の方に、自分のお子さんがどんなふうに育ってほしいですかと聞くと、多分ここのキーワードに入っていることがすべて挙げられると思います。人にやさしい子どもとか、思いやりのある子どもとか、そういう保護者が聞いて、自分の子どももこうなって欲しいなと思うようなキーワードが散りばめられていたほうがいいと私は思いました。

○職務代理者　あとほかに何かありますか。やさしいとか、思いやりのほかに。

○委員　たくましいですね。やはり生きる力だと思うんですけれども、どうでしょう。

○委員　私も感性ということで大賛成です。例えば他者を認め、互いに支え合う力という部分の中で、それが義務のようなことではなくて、やはり自分の力を発揮し、そのことで喜んでくれる相手がいる。そのことが私にとっての喜びであるという感性ってとても大切だと思うんですね。そういう点では感性ってぜひ大切にしたいと思います。

○委員　僕はその感性という言葉も好きで、いろいろとらえられる広い言葉だと思うんですが、すごくオリジナリティーのイメージを持っているんです。ただ、共感という言葉は逆にオリジナリティーがなくなるイメージがあるんです。だから、この２つの言葉はちょっと一緒ではないぞというふうにとらえるんですけれども。

○委員長　それはそうだと思います。したがって、コミュニケーションに当たるところに共感という言葉を使ったら、というご意見だったように私は理解しているのですが。感性は恐らく別のところに入ってくるのだと思います。

○委員　そうですね。それこそ上のほうに。

○委員　例えば何とかの力とかで置きかえると、感性も感じる力だと思うんですよね。人のことを感じる力。いろんな違いを感じるとか。なので、感性というと、すごく広くなってしまうんだけれども、何となく感じる力というと、思いやりにつながったりとかするような気がします。感性というのは芸術的なことも感性じゃないですか、そういうことも含んで入れるんだったら感性という使い方もいいなと思うんですけれども、例えば何とかの力というつなぎで言うと、感じる力とかでもいいような、気がしました。

○委員長　感性の一番ベースは、美しいものを美しいと感じる力だと思います。

○委員　すみません、１ついいですか。私はこの４番の学びのところで、やはり思考判断的な部分、子どもたちのそういった力を育てるというのが必要なのかなと強く思うのですが。先ほどの話で規範意識という言葉を入れるかどうかは別としまして、ルールをきちんと守るという判断の

できるような子どもたちを杉並では育てていくんだという視点が重要かなと思います。例えば○○委員は、保護者の視点から見たときに、そういうのが入ると、違和感が出てきますでしょうか。

○委員　例えば規範意識と言われると、私はどちらかというと、そういういろんな規範意識について聞いている機会が多いので、こういう言葉だなとわかりますが、普通の保護者の人が、規範意識と言われると、ピンと来ないところがあると思います。

○委員　自ら判断するとか、考えるということであれば、それは大丈夫でしょうね。

○委員　そうですね、そう思います。

　ただ、社会一般のルールを守って、自分で判断して、正しいことを選択していく力は、やっぱり必要だと親はみんな思っているので、その辺は入れても全然違和感はないと。

○委員長　ちょっとお伺いしたいのですが、私は４番のキータームは、継承・循環していく力だと思うのですが、これはどなたがおつくりになったキーワードですか。

○職務代理者　これは、小中の時は地域に密接に関わっていたのだけれども、高校や大学で離れてしまう。だけど、また親になっても戻ってくるという、循環というような形のことが議論されていて、それを事務局が、循環していく力とか継承していく力という形でまとめてくれたのだと思います。

　だから、ここのところの４のところで、恐らく前半の部分は、うちのほうだけ取り上げていくと、この上の１、２、３のところが、要するに身についていくと。それが後で杉並という地域にまた戻るようになる、あるいは循環するよねということを多分イメージされて、つくっておられるのかなというふうに思うんですけれども。ただ、並べて見たときに、ちょっと奇異な感じがしないでもないかなとは思います。

○委員　私も最後の学びの成果を継承・循環していく力というところを実は気にしています。前回の私たちのグループでの話の中にも、高校・大学の部分が抜けているところが気になりますということがありましたが、そういう人たちが結局またいったん出ても地域に戻ってきて、また地域で支えていく力の一つとなっていってくれるというような部分をこれはきっと含んでいるのかな。ですので、ただ学んで終わりじゃなくて、学んだ自分たちがまた戻ってきて、その恩返しというとおかしいでしょうか、自分たちが学んだことをそのまま、また次の世代に伝えていくというような部分をきっとこの継承・循環というのがつかんでいるのかなと思います。継承・循環と言ってしまうと、上のやさしく支え合うという言葉に比べると、かたい感じがするので、バランス的にどうかなと気にはなるのですが、その意味合いはすごく気に入っています。

　また、この中学生レスキュー隊という資料をいただきながら思ったんですけれども、中学生だけで今このレスキュー隊というのをやっていますが、そういうことを経験した子どもたちが、その後、高校になっても地域の消防団に関わったり、大学になってもそういうところに関わったり

というふうにつながっていく。今、震災を受けて、自分たちにも何かできることがあるんじゃないかという気持ちが中学生だけではなくて、小学生でも、もしかして自分たちが人を助けられることがあるのかなみたいなことを考えて、学校でもいろいろ募金をしたりとか、学用品を集めたりとかしていると思うんです。そういうところの気持ちをずっと持ち続けて、自分たちはただ助けられて、育てられるだけじゃなくて、今現在も役に立つ、そして10年後にもまた戻ってきて、地域の役に立つみたいな部分というのが入っている感じというのがすごくいいなと思うんですけれども。

○委員長　育てたい力の４番が今話題になっているのですが、これを、学びの成果を地域や社会に還元するというようにすれば、子どもにも大人にも当てはまります。また、生涯学習にもそういう概念が入っているとも言えます。そうなれば、それはその下の箱の中の基本的な視点で述べていくという方法もあると思います。

○委員　今伺っていて、どちらかというと人間像というよりはシステムでもいいし、もっと大きく上の目指す教育のところに、例えば、共に創り継承する杉並の教育ですとか、広げていく方法もあるかなと。

○職務代理者　やはり次元が上か下かで違ってきますよね。１から３のところは、今、皆さんで議論されていても、かなり子どもを念頭に置かれていましたよね。４番目のところは、これは子どもだけじゃなく、時間を少しずらしていますので、同じレベルで並べると違和感はどうしても否めないのかなと思います。ということになると、今、○○委員がおっしゃったように、上に上げて、大人を含めた目標にしていくのか、あるいは基本的な視点のところで、いわゆる具体的形に落とすのか、どちらかになりますね。

○委員長　そうですね。上に持っていくと、魅力的だけれども、ふさわしい文言がどうやったら出せるか。でも、今の○○委員のお話というのは、コミュニティというものを相当意識された言葉ですよね。

○委員　結局は、先ほど申し上げましたように、コミュニティベースでこれからつくっていきますけれども、その一つのキャッチフレーズみたいになってしまうのですが、例えば「共に創り、継承する杉並の教育」というのがあって、そのサブテーマとして学校、家庭、地域が学び育てる何とかとか、そういうような持っていき方もあるかなと思います。

「つくり」というのは創造の「創」という言葉ですが、継承する杉並の教育です。杉並の教育がなくても、「共に創り、継承する」というようなキーワードでもいいかなと思うんですが、学校、家庭、地域が学び育てる杉並の教育というふうにそちらにつける方法もあるかもしれません。

○委員長　サブで。

○委員　はい。今思いついたところなので、文言はちょっと。

○委員長　第１回の教育長のご発言だったか、競争から共創、という表現をお使いになってらっしゃるんですね。共創をほぐすと、「共に創る」ということになるわけですね。
これは、使いましょう。共創と継承。継承は少し堅いかな。でも、このニュアンスを生かすと還元という言葉も使えるかな。学びの成果の還元ってよく使いますよね。ただ単に暗記していればいいというものじゃないというようなニュアンスも入りますし、大人になって学んだ成果を社会に、地域に生かしていくということだって言われますし。
○職務代理者　あと、感性がありますね。
○委員　循環というのも全く違う視点ですよね。循環という言葉自体。
○委員　言葉で全然違ってくるなと思うんですけれども、還元するとなると、自分が主体となって、戻していくというニュアンスで、循環するとなると、自分が主体というよりも、むしろシステム的な感じだと思うんですけれども。継承も多分、システマティックかな。
○委員　動かない気がしますね、継承だと。
○委員長　では、こういう発想はどうでしょうか。共創というのをやめてしまって、「共に創る」を生かして、「共に創る・何とかかんとか」……
○職務代理者　「共に創る」は、子どもがメインなんでしょうか。それをどうとらえるかで違ってきますよね。
○委員　イメージとしては学校をつくるというのも「共に創る」です。
○委員長　市民協働も入ってくると思います。
　それから、共に創造するという意味では、子どもへのメッセージでもある。
○職務代理者　大人も入りますよね、多分。
○委員長　入ります。
　「共に創る」というのを、大人、地域ぐるみと考えれば、必然的に循環とか共創が概念として入ってきているのではないでしょうか。含まれているとも言えます。一緒になって創っていくわけですから。
○委員　「共に創ること」を時間軸で言うと、継承とか、伝承とかになるのですよね。ところが、平面軸で言うと、広がることなのです。だから、「共に創る」ということが、時間軸でつながるのと平面的で広がるのと両方あるような気がします。
○委員長　それは言わなければいけないことなのか、言わずもがなのことなのか。
○職務代理者　メインではなくても時間軸の説明はどこかで欲しいですね。上のほうでは要らないと思いますが。
○委員長　つまり、一番上の箱ね。
○職務代理者　短いところでは要らない。

○委員長　基本的視点の中で。

○職務代理者　時間軸をイメージして、大人のことが入っていますよというメッセージが必要だという気がします。

○委員　「共に創る」という言葉は、「何を」で、時間なのか、広がりなのか決まってしまるような気がするんですね。だから、その何をというところが余りはっきりしない言葉のほうが、一番上の部分にはふさわしいのかなというふうにも思います。

○職務代理者　今おっしゃられた、何をの部分のイメージがある程度伝わらないと。

○委員長　では、とりあえずその２つ目の箱の目指すべき人間像の育てたい力の４番目は、ちょっとここから外して、まず上のほうにそのニュアンスを放り込むという努力をしましょう。同時に、これに見合う基本的な視点が、その下の箱に新しく加わってこなければいけないとなると思いますが、どうでしょうか。基本的な視点のほうに落とし込んでもいいかもしれません。

○職務代理者　育てたい力の２番目、多様な関わりの中で、伝え合い、理解し合える力（コミュニケーション能力）というのが、先ほど委員長から出された感性という言葉とイコールではないので、また別立てになるのではないでしょうか。

　コミュニケーション能力というのは、いわゆる人と関わる力みたいなこととは別に、感性とか感じる力みたいなことが、本来的にはそこに入ってこないといけないのではないでしょうか。

○委員長　今、ふと気がついたのですが、この「共創」というキーワードは、「競争」というもう一つのキーワードがあって、競争から共創へという文言になった時に初めて生きる言葉なんですよ。なので、共に生きる共創を単独で使うというのは非常に難しいということに今気づきました。違いますか。レーシングの意味である競争が前段にない限り、この言葉は生きてこないのではないでしょうか。

○職務代理者　ただ、入れてしまうと、今までやっていた、レーシングの競争を否定する形のニュアンスが強くなってしまいますよね。

○委員長　要するに競う競争は不可避のものであるが、創る共創は不可欠のものであるという言い方ができます。避けがたいものとすると競争ですが、共に創る方は、不可欠なものとして、目の前にあると言い得ると思います。

　だから、この言葉を目指す教育の基本目標に使うのは、よほどいい組み合わせを使わないと難しくなってくるような気がします。

○職務代理者　下に書いてある循環とか、還元とか継承のところが、この前、永井班のほうで出たところで言う、響き育てる「響育」になってくるんだと思います。もしこの字が使えたら、うまくそのニュアンスが出せるのかなと、今、思っていたのですが。

○委員長　響くを。

○職務代理者　響くを。

　あるいは、「共」と「創」と、あともう一つぐらいの感じで。

○委員　この「ともいく」の共育と、「響き合って育てる」の響育というのは、意識して使うのですが、最初は「共に育てましょう」の共育で、さらに発展していって、「互いに響き合って育っていきましょう」というイメージなのです。

　つまり、「ともいく」の共育と「響き合い育てる」の響育は、並列というよりは発展していくイメージなのですね、私の中で。ですから、お互いに育ち合いましょう、共に育てましょう、育ち合いましょう、学び合いましょうから、もう少し進んで、今度はもっと深いところでお互いに響き合って、いいものをつくり出していきましょうということで、良いことをいろいろやっているのだけれども、それが互いにもっと広がっていくというか、響き合っていくというか、非常に情緒的な言い方になるのですが、そういうイメージをもっています。

　ただ、この言葉はあちらこちらで出ていますし、様々なところに書いてある言葉ですので、杉並のオリジナリティーを出すということのほうがいいのではないかと私は思います。

○委員長　とりあえず合意できそうなのは、目指すべき育てたい人間像の内、２つの丸の部分ですね。文言は別に考えるとして使いましょう。それから、育てたい力の上の３つも、言葉遣いは別として、残しましょう。４番を上に持っていきたいとも思いますが、うまく言葉が生み出せなければ、基本的な視点の方に１行で書き込めたら、ということでしょうか。その他のところは、いいだろうというような感じですよね。

○委員　○○委員が先ほどからおっしゃっている「判断する力」というところを、私もとても感じているところで、子どもたちが正しく選択したり、判断したり、見極めていく力というものを育てていく、つまり賢い子に育てていかなければいけないといつも思うのです。これは教育の役割だろうなという思いがします。つまり、簡潔に言えば、自分を律する「自律」という言葉になってしまうのかもしれないのですが、そういうイメージと、それから、今とても感じているのは、何か大人も打たれ弱くなっているというか、困難に出会ったときに、それを切り崩して進んでいくとか、転んでも、転んでも立ち上がってというようなことがなくなっているのではないか、と感じます。杉並で育った子ども達は、ひ弱ではなくしっかりと教育をした末には、大きな困難にも堂々と立ち向かっていく力がある、そういう人に育てたいという、メッセージが欲しいと思います。

　それは親御さんの立場ではいかがでしょうか。何か重いですか。

○委員　いえ、そうだと思います。さっき私もちらっと言いましたけれども、たくましく育っていって欲しいと思うので。どんな困難が目の前に立ちはだかっても、やはりそれを自分で切り拓いていく力というのは、つけていって欲しいなと思います。それは、学校だけがつくるものでは

なく、親もともに一緒につくっていくものだと思いました。どうですか、もう一人、保護者の方がいらっしゃいます。

○委員　そうですね。今のたくましさとかそういったこととはちょっと離れてしまい、オリジナリティーがあるかどうかわからないのですが、その競争という言葉でキャッチコピー的に同じフレーズを使うとしたら、例えば「共に想う」で共想とか、思いやりという言葉が、前に出ていたんだけれども、今見るとどこにもないなと思うんですが、その思いやりの思いが想像の想になるのかどうかわからないんですが、例えば「共に想い合う」という意味の想もいいし、例えば響き合う響育ですと、響育と共創と使ったとしたら、「響き合い、想い合う」ということで「響想」という言葉もつくれるのかなと。今、ただ造語をつくってみただけなのですが、子どもには思いやりを持って、やさしい子になって欲しいというのはあるので、どこかにその「想う」という言葉があるとうれしいかなとは思いました。

○職務代理者　そうか、強さか。

○委員長　力強いメッセージを求める方もいらっしゃる。

○職務代理者　３番は、体だけに押し込めてはいけないね。

○委員　今のお話をそうだなと思って伺っていたのですが、そうしますと、きっと今まで使い古された言葉ですが、どんと骨太の教育ということになってくると思うんです。骨太って結構使われていると思う。骨太の教育ってやってしまえば、逆にそこにはいろんなことが、共生も響育も全てのものが入ってくる大きいものになり得るような気がします。

○委員長　おっしゃりたいこと、わかります。

○委員　３番の人生を力強く生き抜いていくというところを体の力と言ってしまうと、本当に体力、体ですとか、確かに食育などを入れていくというのはとてもすばらしいことだと思いますが、そこにやはり気持ち、強く生き抜く、精神力、精神面みたいなのも含めての力強く生き抜く言葉というのが、入っていてくれるといいのかなと、最初に感じたんですが。

○委員　力は入らないんですけれども、よく学校では心と体なんていう言い方をしますよね。

○委員　どうしても体の力と言ってしまうと、肉体的な部分だけというふうにとらえてしまうのですが、そこに委員長が感性とおっしゃったように、感じる部分、気持ちの部分というのがこの中のどこかに入っているともう一ついいのかなと思います。

○職務代理者　心と体の力か。

○委員　すごく似ている話になるのですけれども、判断とか、今、○○委員が言われた選択する力とかは、人生を力強く生き抜くための力なんですね。これはキャリア教育ですごく大事にしていくところでもあります。体の力というと、生活習慣なんかも含めちょっとフィジカルな側面があるのですが、例えば生き抜くための「体の力と心の力」ではちょっとおかしいけれども、何か

同じような並列的な心と体みたいなところで、判断力とか規範意識とか、そんなところが入らないかなと思っています。

〇職務代理者　でも、力強く生き抜くというので、やはり一つのフレーズというか、一つの意味合いがあると思います。体であったり、心であったり、その心のところも今言ったように、自分の将来決定まで含んだニュアンスも入ると思えるんです。ただ、３番がかなり大きくなるな。

〇委員長　でも、それを言い始めると、人生を力強く生き抜いていくための知力というのが必要になる、という考え方も成立する。

〇委員　２番の分類と３番の分類では、中分類と小分類ぐらい、ジャンルが若干違ってくるかなという心配もありますね。

〇職務代理者　逆に１番のところが余り出ないのですが、いかがですか。他者を認め、互いにやさしく支え合う力というのが今まで出ておりますけれども。

〇委員　これはでも、先ほどやさしくは取ったほうがいいよというお話。

〇委員長　それは私の個人的な意見で、皆さんの総意を得ているわけではありません。

〇委員　取ったほうがいいかなと。厳しく支え合うも。時には。

〇委員長　ちょっと話がそれますが、今年、小学校で本格実施に入った、新しい学習指導要領のキーワードは、生きる力の継続ですが、中教審や文科省は、言語活動について力説しています。言語活動は知的活動のベースであるというのが一つと、感性、情緒のベースをなすものであるというのと、コミュニケーションのベースをなすものであるというものです。その位置づけの中で、言語活動を充実していきたいと言っています。これは実は、取り組みの基本的な方向のあたりに一言も入っていないので、私も是非この部分は一言、入れて欲しいと思っています。言語活動のベース、つまりコミュニケーションも入るのですが、その言語活動がなぜ必要かというときに、知的活動、論理や思考、コミュニケーションそのもの、それから、感性や情緒というもののベースとなるものであるというのが気に入っています。せっかくこういうのを打ち出しているので、全国共通とはいえ、今の若者たちの弱点でもあるので、きちんと書き込んだほうがいいのではないかという気がするんです。

〇委員　今のお話にちょっと関連するんですけれども、自分の思っていることを表現するのは、主に言語だと思いますが、自分の判断力も関わってくると思うんです。自分で物事を判断して、それに対して自分の思っていることなり、意見なりを表現する力というのもすごく必要なんじゃないかなというのを今のお話を聞いて思いました。多分それは育てたい力の伝え合いというところに、２番目の多様な関わりの中で伝え合い、生かし合える力というところにも、コミュニケーション能力が入るのかと思うんですけれども。今、結構みんな、空気を読め、空気を読めと言われて、自分の意見を言ってはいけないんじゃないかとか、どうしても周りに合わせてしまう傾向

にあると思うんです。そういう意味で、私も判断力というのもすごく大事だと思って、やっぱり外に、周りの人に判断力を委ねるんじゃなくて、自分の知識や経験を生かして、自分で判断する力というのと同時に、判断した結果を自分で表現する力というのもすごく大事だと思っています。そのためにはやっぱり感性というところも関わってきますし、力強く生きるためにも、もちろん必要だと思うので、どこかに欲しいなというのは思いました。

○職務代理者　何を基準で整理するかですよね。目指すべき、あるいは育てたい人間像のところですね。例えばやさしく伝え合うといったような文言で整理をしていくのか、今、あったような形での、いわゆる体の力とか心の力みたいなことをベースにして整理をしていくのか。その両方を入れてしまうと、かなり長い形になると思うので、何をベースにというところだけをまず決めたほうがいいのかもしれないですね。幾つかの次元が今入ってきて、４番目のところの循環・継承のところは飛びました。また、伝え合い、理解し合うというのもあるので、「伝える」は文言が重ねるような感じになるのかもしれません。

　あと力強く生き抜く。感性のところは、ぴったりした言葉がまだ出ていないと思いますが。

○委員　幾つか育てたい力があると思うんですね。言語能力もそうでしょうし、そういうものの中から、この育てたい力のところに３本柱で集約していくのか、それとも、よく言われているような、知・徳・体というような、人格の形成を目指すバランス性を重視して、ここに項目を立てて、それを杉並の言葉で語るようにするのか。この構造の部分をもう一回私たちも共通で理解したいなと思うのですが、例えばここに心と体を育てていこうという項目があったとします。すると、下のほうの基本的方向にそういった健康、体力の向上に向けての何か文言がつながっていくという関連性を持たせていくんだとすれば、幾つかある能力の中のトップスリーがここに集約されるみたいな考え方もできるのかなと思うんですが、その辺は委員長はどうお考えになりますか。

○委員長　知・徳・体のバランスのよい教育というのは、きわめて当たり前の話であって、全国共通で目指すべきものです。これは過去も現在も未来も変わらない。したがって、今後10年間、杉並ではここに力を入れていこうよというものを入れた方がいいのではないでしょうか。例えば、杉並は、ＮＰＯやボランティア・グループ、学習サークルが数多く存在することでは、全国でも指折りの地域です。それらをベースにして、さまざまな教育改革を展開している都市型住宅都市です。その住宅都市杉並の10年間を考えた場合に、支え合うという言葉が出てきたり、多様な関わりの中で云々というのも僕はあっていいと思います。人と人との関わり合いが、例えば東北に比べれば弱いところ、薄いところですよね。かつてのような村落共同体型の社会に戻れるわけもないし、戻りたくもない、しかし、現在は、かつての共同体は壊れてしまったけれども、新しい共同体を発見し得ていない。コミュニティがなければ世の中のシステムも、子どもの社会化も動かないわけですし、コミュニティがしっかりしなければ、学校がよくならないというのも当たり

前なわけですから、住宅都市で、大都会という杉並ならではの10年間で強調すべき子どもへのメッセージとなるのではないですか。全国的にそれはそうだよねというのではつまらないので、杉並はこういうところだよ、ここにちょっと力点を入れてやりたいというものが出ればいいのではないでしょうか。知・徳・体というのは当たり前だし、感性も当たり前といえば当たり前というふうになるかもしれない。そうすると、こういう比較的、人間と人間との関係性が薄い杉並で何を強調するべきなのかというところに着目をする手もあるのではないかと思うのですが、どうでしょう。

○職務代理者　今、委員長のお話を伺っていて感じていたのは、いわゆる昔型の共同体じゃないといったときの、杉並区民に求められることというのは、異質性との遭遇、そしてそれを処理する能力なんですね、やっぱり。

　実はさっきお話ししなかったところで言うと、文科省の言っている生きる力と、ＯＥＣＤで言っているキー・コンピテンシーのもとになっている考え方が、文科省はほぼ同じであると、中教審答申の中で言っているのですが、私が見ると違っています。何が一番違うかというと、前提になる考え方や思いが違っていて、実は人とうまくやっていくために必要な力というのがキー・コンピテンシーなんですね。杉並は都市型で、ある意味、人と人との接点が希薄ということで考えていったとします。すると、いわゆる違ったことへの対応力や自分の決断や判断ができるようになっていく力というのを育てていくことが、重点としてあっていいのかなと思いました。

　ただ、気になるのは、知育、徳育、体育はもう普通にやっているからそうじゃないものを、ということですが、普通の人が見たときに、その言葉がないのは、いいのかなと思われはしないか、というのがどこかにあります。そのバランスがどうやったらとれるだろうということを今ちょっと考えております。

○委員長　それは基本的方向の中に、言うまでもないことだがと入れておけばいいのではないでしょうか。言語力も学習指導要領が、全国共通として国家基準で出しているわけですから、何も杉並の教育という形でやる必要はないという考え方もあるわけです。

　ただし、杉並はさっき言ったように、住宅都市、大都市、それから、コミュニティというものが比較的弱いとすれば、言語力はとても大事だと思います。ですから、この部分は指導要領でも言っているのですが、杉並はもっと大事にしようという出し方もあると思います。いろいろな言い方があるのではないでしょうか。

○委員　資料で配っていただいた、基本構想審議会の第３部会で審議をしている幾つかのテーマの部分が杉並の背景にあるということは私たちも前提として、ここの絞り込みの材料にしていっていいわけですよね。

○委員長　確かに育てたい人間像とか、力というものを議論し始めると、恐らくは100ぐらい出

てきてしまいます。その中で３つ選ぶという作業をやる場合には、やはり杉並というキーワードを放り込むことによって、メッセージ性を増すというようになってくるのではなかろうかと思います。僕は杉並の住民ではないので、ここのところは、杉並の方々に積極的に発言をしていただきたいと思います。

ただ、見ていると、育てたい力の１と２はかなりこの杉並に力点を置いていいのではないかという項目になっていますよね。

○委員　ちょっと的外れな質問かもしれないんですが、育てたい人間像というのは必ずしも教育を受けるほうだけではなくて、地域コミュニティそのものもこういうふうに育てていってもらいたい、例えば子育てに悩む保護者の方が、やっぱり力強さを持っていくとか、コミュニケーション能力を高めていくとかいうことも含めて考えていいわけです。

○委員　職務代理者のお話をお伺いして思ったんですけれども、この１番の他者を認めというところが、その他者というのが、キー・コンピテンシーで出てくる異質性というか、ここを前提として違う背景を持っている人たちとか、自分と違う意見を持っている人たちを認めるということにつながると思うので、そこにそういうことを入れてもいいかなと思ったのですが。他者というと、ちょっとオリジナリティーがないかなとも感じるんですが。

○職務代理者　これとこれは何となく出てきたんですね、今、下のほうのこれこれとのつながりは…。

○委員長　今、職務代理者からいい指摘をいただきました。２つ目の目指すべき人間像のところで、丸が２つあって、２つのキーワードがありますよね、そのうち下の段の、人との関わりを大切にし、地域社会に貢献する人を育てますというのは、その下の育てたい力の１、２に該当する部分がかなりあるんですよね。

ところが、夢に向かって自信を持って自ら歩む道を切り拓く人を育てますという文言に対応する育てたい力というのが出てこないわけです。なので、理論的には、最低一つ考えなければならないか、あるいは外すかという選択肢になってしまうんですね。

○委員　ここがまさに、何回か先ほどから話題になっている、自己判断力ですとか、決断力とか、そういうところになるところかなと。ですから、それを何とか、この丸２つを残しながら、育てたい力として書き込んでいける方向が僕は欲しいなと思うんですけれども。

○委員長　では４番は移動、３番は内容を含めて文章を変える。今のところ、この中では「あ、それ」というアイデアは出てきていないので、皆さん方の意見を全部踏まえながら、事務局と職務代理者とで考えて、皆さん方にこれでどうですかとご提案したいのですが、よろしいですか。

それで、今後の10年を見据えた目指すべき杉並の教育というところを、とりあえずどれかに絞っておきましょうか。例えば地域ぐるみで学び合い、支え合う杉並教育か、言葉遣いはともか

く、そんな感じで。

○委員　そういう大ざっぱな言い方でいいんでしたら。

○委員長　言葉遣いはともかくというのはそういう意味なのですけれども。

○委員　学び合い、支え合い、育ち合いということ。

○委員長　つまり、新しいコミュニティの創造を頭の中にインプットしながら進めていこうねというニュアンスがあるほうがいいという趣旨で言ったのですが。何か今までの、育てたい人間像のところの議論をしてみて、もう一回、上に戻って、何かありませんか。今までの議論を踏まえるとこうだよというような。

○委員　誰もが共に学び合い、支え合い、育ち合う……地域ぐるみというと、どうしても何か地域というのが、周りを囲んでいる地域の人々という印象がちょっと強くなってしまうかなと感じます。家庭、学校、地域というのが、それを表している言葉なんでしょうけれども、そこにやっぱり学んでいる子どもたちも一緒に交えてみたいな感じで、誰もが皆みたいな、何かそういうニュアンスというのが。

○委員長　ただ、地域は一つのキーワードで、ぜひとも欲しいという意見もあります。それを、地域を使わないで、コミュニティという言葉を使うことによって、何となく言葉の響きとニュアンスが違ってくるということも考えられます。また、市民協働か協働という言葉を使うことによって、杉並は、ＮＰＯボランティアや学習グループがたくさんあるところですので、そういうものとコミュニティの弱点の部分が、これからどんどん良くなり、ひいては教育を良くしていくんだねというニュアンスを出していこうというのもあると思います。

○委員　杉並の教育のコンセプトの大きな柱は、「いいまちはいい学校をつくる」です。そのため、地域という言葉は、キーになるのではないかと思います。今、盛んに出ていましたけれども、知の循環型社会をつくるということは、地域という土俵の中でいい学校を育てるということです。地域の学校を出た子どもたちが、将来その地域に戻ってきて、その学校や子どもたちを支えるという、循環型の社会を目指そうとする。それは地域に支えられているとも言えますので、やはり地域という言葉は外せないだろうと思っています。

○委員長　私もそう思います。

　ただ、○○委員は、「みんなが」というようなニュアンスで学び合い、育て合い、支え合うというニュアンスにして、そこには地域という概念は入っていますよということを前提でおっしゃっているんですよね。

○委員　はい。もちろん私も今は、地域の人間としての立場で活動していますので。でも、既に、杉並区では地域で支えましょうですとか、「地域ぐるみで教育立区」というのをやりましたよね。地域で頑張っていきましょうという感じはすごく打ち出されてきているので、それはもう当然の

ことだというふうに皆さんの中に位置づけられているとしたら、委員長がおっしゃった、コミュニティと表現するのが、すべてを表している感じがしました。ただ、その言葉をどこに持っていくかというのは、非常に難しいかなと思ったのですけれども。

○委員長　現在のキーワードは、「いいまちは、いい学校をつくる」です。これを並べるとどうですか。「いいまちは、いい学校をつくる」は、そのとおりなので生かす。そして「いいまちを市民協働でつくる」とやると、何となく全体が出てこないでしょうか。長過ぎますかね。

○委員　ちょっと笑われるお話かもしれませんが、この「いいまちにいい学校をつくる」というのは、最近いろいろ言われているお話で、もともと大昔は基本だったような気がするんです。それで、この10年で今、教育のいろいろなお話も、別に杉並でなくてもいろいろなところでお話がされていることだろうと。要は今までいろいろな施策をやってきて、今後10年で杉並をもっと大きくするとか、人材が戻ってきて、何とかするような、演劇的発想で言うと、杉並人をつくるみたいなことになるんですが、まず杉並人を20年つくって、次の10年でその杉並人がほかに出ていくとか、杉並人を外に放出するではないですが、リーダーシップ、リーダーとしての広がりをしていくとか、僕も何をつくりたいかというのが、１人の人間として、育てたいのか、杉並の人を育てたいのか、どっちなのかなというような、ちょっと僕の中で今ぼやぼやとして、物すごく杉並人、杉並人というのが頭の中にいっぱい、「スギナミビト」というんですかね、ここにいっぱい出てきているんですけれども。

○委員長　両方入るのかな。

○職務代理者　ずっと今お話を伺っていて思っていたのは、まちと学校と人なんですよね。順番でいったら、どれが先かということだと思うんですね。もちろん全部関係するので、どれが最初ということはないのですが、いいまちはいい学校をつくるという前に、いいまちというのはいい人がいるということですよね。いい人がいいまちをつくって、いいまちが学校をつくるから、いい学校でいい人になっていくという循環になっているということが見えるといいのではないでしょうか。

　だから、学校をつくるで終わってしまうと、いわゆる教育向けのメッセージ、スローガンのような形で終わってしまいますので、それがまた戻って、いい人になって、そのいい人がいいまちをつくっているというように回っていかなければいけないのではないでしょうか。

○教育長　いいまちはいい学校を育てる。学校づくりはまちづくりというのが我々の基本構想です。

○職務代理者　いいまちはいい学校を育てる、

○委員長　学校づくりは、

○教育長　まちづくり。

今、職務代理者がおっしゃった循環、地域が育てる学校、そしてその学校を育てるという行為を通して、地域が活性化される。そしてまたそれが子どもを育てる。

○職務代理者　というふうに回っていくという形ですよね。

○教育長　循環型の。ここで提起されている知の循環、社会、教育の部分が絡まっていくという、それはこの間、ずっと主張してきたことではあります。

○委員長　これをブラッシュアップした新しいキーワードがあればいいですね。市民協働はかたいですよね……でも、市民協働というのはまだまだ新鮮なところがあるから、使う手はあると思います。社会総がかりとか、地域ぐるみという言葉は余り使いたくない。

○委員　私もこのキャッチフレーズはすごく好きなんですね。これをあえて変えなければいけないのかなという気持ちがあります。ちょっと自分の世界に引きずり込むような話になって申しわけないんですけれども、先日、福祉の会合に出たときに、知的障害の人たちのグループホームを区有地につくるということで、福祉の担当部署がいろいろと説明会をしていった中で、最初にその話を理解してくれたのが、その近隣の学校のＰＴＡの会だったというお話だったんですね。それは僕にはある意味ではすごくうれしかったんです。学校がこれから発信していくことが、地域に広がり影響を及ぼしていく。例えば、障害のある人とない人の関わりを大切にする、あるいは排除しない包み込むインクリュージョンといったことを学校から発信していくことってすごく大きいと思います。別にそれに限らず、地域社会をこれから変えていくというか、よりよく自分たちが住みやすい方向にしていくということでは、学校からの発信にはある意味大きい力があるんだなということを、想像したんですね。

ですから、この言葉は大切にして、これからこれが生かされて、進められていくところもあるんじゃないかなと思いました。このフレーズを変えなければいけないのか、どこかにやっぱり残したいなと思っているんですね。

○職務代理者　この言葉はもう公式文書で出ているんですか。

○委員長　使っていますね。

○教育長　これは私が着任したときに、教育長の基本的なコンセプトは何なんだというから、こういうことですと、それで教育ビジョンの改定のときに、一回、教育ビジョン推進計画の改定のときに、一番下にキャプションとして入れた。それを図式であらわした。緑色の教育ビジョン推進計画の……

○委員長　だから、これをベースに置いた上で、今後10年間の目指すべき教育像は別のキャッチコピーを使ってみましょう。教育ビジョン推進計画の３ページに、いいまちはいい学校を育てるとある。これは、我々が策定しようとしているビジョンの中でも、どこかで生かしていきたい。ただ、やはり今後10年間の目指すべき教育というのはこれだよ、というわけにはいかないような

気がするのですが。その精神はもちろん生きるのですけれども。

○職務代理者　このために何をするのかなということですよね。

○委員長　そうです。

　これはだから、ビジョンの中にも入れ込んで、継承されるのだという位置づけをまずやっておく。それで、さらにステップアップして、もっとリアルにわかるような何かを考える。地域ぐるみみたいな、社会総がかりというような扱いのところ……

　やはりこれを発展させるのに必要なのは、間違いなくコラボレーションです。コラボレーションという言葉は使えないけれども。

○職務代理者　ですから、下のほうからでいくと、自らとか己の部分と、あといわゆる人との関わり合いで、「共」の部分ということですよね。その２つが、両方がそこに入るという形になるわけですよね、そこの上のところに。

○委員　それをこの目指す教育のところで書いてある文言で言いかえるとすれば、やはり学び合う、支え合うということになるんでしょうかね。

○職務代理者　ただ、そのニュアンスが伝わるかどうか。

○委員長　それはサブタイトルをつけてもいいと考えます。非常に柔らかい言葉遣いで、学び合う、支え合うという言葉を使ってみる。市民協働というようなかたい言葉を使ってみるのも一方法です。ぱっと伝わる柔らかい言葉や非常にかたい言葉を、サブタイトルにおく手もあります。

○委員　子どもが言いそうなんですけれども、学校の未来はまちの未来とか、そんな感じですかね。

○職務代理者　教育ベースだったら、これがひっくり返ってもいいんですよね。いい学校があるから、いいまちになってくるという言い方のほうが、教育ベースで考えれば、本来的にはあってしかるべきなんですよね。

○教育長　実はそれが入っていたんです。いいまちはいい学校を育てる、いい学校があるところにいいまちができる。だから、学校づくりはまちづくり、いずれは学校づくりにつながるんだという長ったらしい文章だったのを。

○職務代理者　削ったわけですよね、多分。それをだから、違った言い方で何か出てくるとおもしろいと思うんですね。そこを行政のほうからいけば、まちから学校……

○委員長　誰がどうやって、いいまち、いい学校をつくるのですかということじゃないですか。

○委員　やはりそのときに地域という言葉が何らかの形で入ってくるべきだと思うんですね。文章を見たときに、地域ぐるみ、学校、家庭、地域、地域社会というような、文言をたぶん整理されるのだろうと思うんですけれども、地域コミュニティですか、どういうベースにして、この10年間やっていくかという、そのエリアというか、組織というか、対象をうまく言いあらわす言葉

をこの中から模索できればいいかなと思います。地域コミュニティというのは言葉としてはおかしい？……

○委員長　おかしくありません。小中一貫は引き続いて、当然のことながら、コミュニティの関係性を非常に重要視してやろうとしている。それから、コミュニティ・スクールをさらに増やしたいという、これまた地域学校運営協議会ですから、コミュニティとまさしく密着した、あるいは支え合うような感じのものが増えていく。さらには、子育て関連計画が今、策定中であって、これが地域ぐるみや地域ネットワークの中で子育てをしていこうという発想をさらに飛躍的にさせていこうとしている。今やろうとしている、さらに広げようとしている、ステップアップしようというのは、みんなコミュニティ絡みなのですよ、杉並は。

　何でしたっけ、学び合い、育ち合うでしたか。

○職務代理者　はい。○○委員から、学び合い、支え合い、育ち合いというのが出て、その後に、誰もが共に学び合い、支え合い、育ち合うというのが○○委員から出ました。

○委員長　ここに何か入れるんでしょう、かたいキーワード。サブで。

○職務代理者　本当は、ハウがあるといいんですよね。

○委員長　市民協働という概念は、コミュニティという言い方をすると、短絡的になってしまうものですが、保護者、住民、サークル、ボランティア、ＮＰＯ、企業を含めた市民セクターと行政、学校が、お互いに連携をしつつ、場合によっては対等の関係を維持しながら、緩やかな緊張関係の中でつくり上げていくシステムです。福祉の世界でも、医療の世界でも、教育の世界でも通用するというのがこの市民協働の概念ということに、今のところなっています。

　したがって、行政と地域との上下の関係は、今はもうあり得ない話ですけれども、ややもすると斜めの関係にはなり得ます。まだまだ我々日本人は不慣れですが、何とか横の関係を維持しながら、勝手なことをせずに、責任感の中で脈々とつくり上げていかなければなりません。杉並は割合にそういう実験が多いところですよね。多いところなので、成熟しつつあるし、成熟させていくことは比較的容易であると僕は見ていますけれども、何もないところでやると、これは大変なことになる。そこで私が前回も言ったのは、もともとある町内会や自治会、民生委員、児童委員、消防団など、かつてからある地域密着型、もしくは部分的に行政とタイアップ型という制度化ボランティアと新しいＮＰＯ関係のミッション型のグループとが融合し、理解し合っていかない限り、だめなのではないかと。市民協働という言葉を使えないかというのが私の発想なのですが、こんなかたい言葉を使うのは嫌だ、というのもわからなくはないです。

○委員　学校の現場では市民協働という言葉は余り使い慣れてはいないと思いますね。

○委員長　でしょう。ですからこれは、恐らくはここの部屋で言うと、行政スタッフの方々でしょうね。そういう意味では言葉としてはまだ新鮮なのです。

市民協働によるまちづくり条例をつくっているというのもニュースじゃなくなるぐらい増えています。マジョリティーかというとそうでもないけれども、そういうものをつくったからといって、ニュースにはならなくなってきている状況になっています。あるいは、長野県では、パートナーシップのまちづくりという言い方をした条例をつくっています。

○職務代理者　コミュニティとか、地域というのも、さっき○○委員のおっしゃっていた杉並人みたいな言葉に入れてしまう方が、私はすっきりするような気がしますね。今、簡単なメモをとりながらずっとお話を伺っていたのですが、キーワードという形で短くするのであれば、それ以外の言葉のほうがいいのかなと思います。ただ、○○委員のおっしゃられたところで言うと、１つじゃなくて、私からすると、杉並人になるということと、杉並人をつくるというほうの相互作用だと思うんですね。それで大人向けのメッセージも多分使えるし、子ども向けにも使えるかなという気がします。

○委員　新しい言葉になると、その根拠づけがなかなか難しくなってくるかもしれませんけれども。

○委員　風当たりも強いでしょうし。

○職務代理者　杉並人と似た場所が絶対出てきますね。ただ、地域云々という言い方をしてしまうと、やはり余りにも抽象的過ぎるんですよ。

○委員長　今のどなたかの発言と私の発言を足し込むと、学び合い、支え合い、育ち合う、それのサブタイトルが、パートナーシップ、もしくは市民協働でつくるコミュニティと学校。コミュニティと教育かな。学校だけじゃおかしいですね。

これをベースにして、職務代理者と私と事務局とで、育てたい力のところあたりについては、皆さん方の意見を集約させて、A案、B案ぐらいの感じでつくり、これでどうでしょうかと皆さんに提示します。

○職務代理者　パートナーシップでつくるコミュニティと教育。

○委員　コミュニティをつくるというのはやっぱりあったほうがいいんでしょうか。教育ビジョンとしてはつくる教育でもいいのかなという感じもするんです。結果としてはまちづくりにはつながるんでしょうけれども。

○委員長　いや、「学校づくりはまちづくり」なわけですから、これをさらに、でも、イコールでもあるわけです。手段としての市民協働、あるいは手段としてのパートナーシップというものを使いながら、やっていくという。これはだから、完成品だ、オーケーということではなく、これをベースにしてたたいてみるというのはいかがでしょうか。もちろん、これで完成品とは思っていません。間違いなく表現や文言は変えなくてはいけないだろうと思っています。

○職務代理者　黄色いのは、この上の３つの言葉で入りますね。最後のほうでいわゆるキーワー

ドとしてコミュニティとか教育という言葉を入れておくということになりますね。

○委員長　これはだから、期待と目標ですよね。これを実現するための手段として、杉並はもともと下地をもっているので、ネットワークを、点から線に、線から面に持っていくようなことをしませんと。新旧を交えて一緒になってというニュアンスを込めてというのはどうでしょうか。

　そうすることによって、どこかにうまく書いたほうがいいと思いますけれども、地域や家庭も教育における重要なアクターです。ステークホルダーではない、ステークホルダーは利害関係人になってしまいますから、アクターです。だとすると、一定の教育責任があるはずであり、当事者意識を持ってもらいたいというようなところにこれをつなげていく。ですから、親教育という言葉がはやっていますけれども、その親教育というのは絶対間違ってはいないのです。ですが、知らず知らずのうちにコミュニティ活動に参加をしていて、自然に当事者としての意識が芽生えていって、自分たちも学び、学校も支えというように、イコール地域もつくる、コミュニティもつくるということになるというように、知らず知らずの教育のほうが、私は効果があると思うんです。親業の講座を開きます、いらっしゃいと言っても、来てほしい人は来ないですよ。

○職務代理者　多分、今のお話の中で言うと、当事者意識という言葉が一番のキーワードなので、それがここに見えるかどうかですね。それをもうちょっと後、こちらのほうで議論して考えるということですかね。

○委員長　ここで、今日は打ち切っていいですか。そのかわり、次は９月１日になっているので、50日くらい時間があるんです。

○職務代理者　それで一回事務局から案を投げていただいて、またご意見いただくというような形にしたいですね。

○委員長　それで、ちょっとしたミニ会議をやって、ミニというのは少人数という意味のミニをやって、皆さんに提示をして、ご意見を求める。

　そこで、皆さん方の手元には、Ａ３の資料６－７というのがあると思うんですけれども、その裏側に新教育ビジョンのイメージというものが案としてあります。これはあくまでもイメージで、この文言は今日の議論を踏まえてどんどん変わってきますし、変更点も出てくるわけですが、こういうようなイメージという感じで、落とし込んでいきたいと思います。

　今日はこの中身の文言についての議論はしません。しませんが、このイメージ図に我々が言いたいことをあらわしていますかと言う観点で議論をしていきたいと思います。

　例えば、真ん中にコミュニティとありますけれども、ここの部分に大きな箱の中に、コミュニティと学校ほかというのが、その丸で重ね合っているというのを行政と区民、保護者、町会、ボランティア云々で支え合うというスタイルの考え方もあるかもしれない。真ん中のコミュニティと学校は、その中で発信し合うという関係性の矢印も成立してくるだろう。それを支えるのが行

政と行政外による、市民協働による支えでもって推進していきませんかというような大ざっぱなイメージなんですよ。

お願いしたいのは、イメージとしてはこれでいいのか、いやいや、ここのところをこう変えるともっとよくなるんじゃないかだとか、中の文言は今日の議論を踏まえて変わりますので、中はとりあえず無視していただいて、このイメージ図について皆さん方に次回にご意見を賜りたいということです。

それで、今日の皆さんの意見を踏まえて、事務局側も我々と一緒になって、これの改善版を考えていくことにもなってくると思います。

何か全体を通じてご意見とか、ご質問とか、ご要望とかあるでしょうか。

○参事　今日は本当に大変熱心なご議論をしていただきまして、ありがとうございました。委員長が今、最後に資料６－７をご提示いただきましたけれども、幹事長として若干ご説明します。これは両面刷りになっていますが、資料６－７と振ってあるほうは、１回目、２回目で確認したようなこと、あるいはこちらからの説明や教育長の基調講演的なあいさつの内容、それから、真ん中のイメージ図は、委員長がこんなイメージでビジョンをつくっていきたいというようなことを整理したものです。

それで裏面のほうは、先ほどの融合案のところでは、言葉だけで階層がつくられていましたけれども、それを、実は事務局も短い時間の中で、委員長、職務代理からご指示を受けながら、いろいろな案をつくりました。消化し切れていないものを出して、大変申しわけなかったと思いますけれども、この裏面のほうのビジョンのイメージ図は、一番上が杉並の教育をよくすると。そのもとにコミュニティの形成というのがあって、それをもとに委員長がおっしゃられた、市民協働の確立という、そういう構成になっています。ここに学校がどういうふうに絵柄として入るのかとか、いろいろな議論がまだ途上のものであります。多分、委員長から宿題というお話になると思うんですけれども、こういったものも下地にしながら、この絵柄も頭に置きながら議論の整理をしていただいて、次回まで50日程度ありますので、また委員の方々ともメール等でやりとりをさせていただきたいと思います。

それから、もう一点は、このイメージ図でつくったものは、委員の皆様から区民の心に届くようなビジョンをつくりたい、わかりやすいビジョンをつくりたいというご意見がありました。今までのビジョンは言葉ででき上がっています。若干写真は入っていますけれども。ですので、例えばですけれども、こんなイメージで行政の役割とか、区民とか保護者、町会、ボランティア、企業の役割というのはどういうふうに絡んでいってコミュニティをつくっていくのかとか、そういう絵柄でわかりやすいビジョンというのもありうるのかなということで、それを実際の成果物に生かすかどうかも含めてご議論いただければと思います。

○委員長　ですので、これは頭の整理上のという側面もありますが、場合によると、これはできがいいね、報告書などに使いましょうなんていうことがあるかもしれませんし、その点でいくと、坂野班のライフステージをベースにしたものも、これはこれでわかりやすいじゃないかと。これも報告書の中の表で、もちろん文言は変える可能性がありますけれども、ライフステージを見れば、ここでありますよと。それから、コミュニティでいうと、行政の関係性で見ればこういうふうになりますよというような、表を使う手もある。もともとは頭の整理のためにつくったものですけれども、その辺の宿題を出しておきますが、その宿題を考えてこられるどこかの段階で、先ほどの２つのテーマ、私たちの宿題についてのメール発信を行って、次回を迎えるという形にしたいと思います。

ご異議ないでしょうか。よろしいでしょうか。

予定の時間を20分ばかり過ぎてしまい、まことに申しわけございませんでした。

事務局、何かございませんでしょうか。

○庶務課長　長時間にわたりまして、ご議論ありがとうございました。次回でございますけれども、９月１日を予定しています。今、大変大きな宿題が出たので、事務局と委員長、職務代理者とで打ち合わせをさせていただいて、何案かお示しをして、またご意見を伺うような形でよろしいでしょうか。それを踏まえて、９月１日までにはもう少し具体像みたいなものも、案として提示させていただきますので、それをベースに次回９月１日の２時から、ご議論をいただきたいと思います。今日はどうもありがとうございました。

○委員長　ありがとうございました。

もうちょっと補足します。６－４を出してください。６－４の、今まで議論した上２つの箱です。下２つについてはほとんど触れていませんので、この２つも一つ考えておいてください。この基本的な視点の中に、これがなければおかしいじゃないかとか、それから、施策の基本的な方向についても、こうなって欲しいねというのがあったら、ぜひ考えておいてください。宿題の追加です。よろしくお願いします。

では、終わります。